

総合的な人間力を育むための 広島大学における合唱・オペラ実習の実践研究

枝川 一也・大野内 愛

(2013年10月3日受理)

A Practical Study of Lessons of Choral Singing and Opera Practice in Hiroshima University for the Purpose of Bringing up of Comprehensive People Skills

Kazuya Edagawa and Ai Onouchi

Abstract: On August 28, 2012, the Central Council for Education outlined the necessary abilities for future teachers in its "Report on Comprehensive Measures for Improving Teachers' Abilities throughout Their Teaching Life". One of the abilities identified in the report was "comprehensive people skills". The report defined comprehensive people skills as "rich human qualities and social skills, communication skills, the ability to work as a team with colleagues, and the ability to collaborate and cooperate with various organizations within the community and society". The "Program in Music Culture Education" at Hiroshima University Graduate School of Education includes lectures aimed at undergraduate student on "Choral Singing" and "Opera Practice". This paper analyzes the practical contents and effects of these lectures and considers their educational significance. Results of the analysis reveal connections between the lectures and the five abilities outlined by the Central Council for Education. In particular, interaction between members of different ages and the planning and managing of regular concerts were seen to play a significant role in the "Choral Singing" lecture. The "Opera Practice" lecture can be judged to be educationally significant since it deals with a form of comprehensive art and requires students to engage in a variety of different jobs. The "Choral Singing" and "Opera Practice" lectures not only foster musical performance ability through practical experience of choral singing and opera, but also aim to encourage students' lecture participation in leadership positions as students work as an independent team in order to produce something together. Therefore, the program contributes to the cultivation of "comprehensive people skills".

Key words: music, comprehensive people skills, choral singing, opera practice

キーワード：音楽、総合的な人間力、合唱、オペラ実習

1. はじめに

平成24年8月28日、中央教育審議会は「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」の答申において、これからの教員に求められる資質能力を提示した¹⁾。その中に「総合的な人間力」というものが存在する。総合的な人間力とは、「豊か

な人間性や社会性、コミュニケーション力、同僚とチームで対応する力、地域や社会の多様な組織等と連携・協働できる力」であるとしている。

山根・木多(2013)は岡山市内の幼稚園・小学校・中学校・高等学校および特別支援学校の校長等に「理想の教師像」についてのインタビュー調査を行うことにより、新規採用教員等の若い教員に求める資質能力

を明らかにした²⁾。その結果、全校種の学校長が重要であると考えている資質能力は「総合的な人間力」であり、その中でも、「豊かな人間性や社会性」および「コミュニケーション力」であると述べられていた。

こうした研究にもみられるように、これからの教師に求められる能力に「総合的な人間力」というものが重要視されていることは明らかである。

平成18年7月の「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」でも総合的な人間力について示されているが、河合（2013）は、この内容に「同僚とチームで対応する力」が加わったことについて、注目すべき点であると述べている³⁾。その点に注目して、河合（2013）は十津川村教育委員会と奈良教育大学教職大学院が共同開催している「十津川サマースクール」に参加した院生を対象にアンケートを行い、その活動と「同僚とチームで対応する力」との関連について論じている。この研究のように、「総合的な人間力」を育成するためには意図的に仕組まれた取り組みが必要になる。

広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学講座においては、学部生を対象に「合唱」「オペラ実習」という授業を開講している。本稿では、この授業の実践内容と効果について分析を行い、教育的意義についての考察を行う。

2. 「合唱」の授業の概要

2.1 「合唱」の授業の沿革

合唱の授業は、長年、音楽文化教育学講座内での専門科目として開講されており、「合唱Ⅰ～Ⅳ」を2年生の前期から3年生の後期にかけて履修できるようになっていた。「合唱Ⅰ・Ⅲ」は前期での同時開講、「合唱Ⅱ・Ⅳ」は後期での同時開講をしており、履修者は、音楽文化教育学講座内の学生が主であった。

平成16年度より、「合唱A・B」の授業が教養教育科目に設定され、全学の学生が履修することのできる科目となった。つまり「合唱A・B」は教育学部のみならず、全学部のさまざまな学生が参加する授業となった。「合唱A・Ⅰ・Ⅲ」は前期に同時開講、「合唱B・Ⅱ・Ⅳ」は後期に同時開講されることになったため、合唱の授業は、専門科目として履修している音楽文化教育学講座の学生と、教養教育科目として履修しているその他の学生が同時に同授業を受けている。

2.2 「合唱」の授業の目的と理念

本授業は専門科目としての役割と、教養教育科目としての役割の2つがある。

専門科目としては、音楽的能力の育成、指導力の育成が期待できる。特に本授業は音楽文化教育学講座の学生とその他の学生が同時に授業を受けているため、音楽文化教育学講座の学生は、その他の学生とのコミュニケーションをとりながら、指導力を身に付けることができる。

教養教育科目としては、リベラルアーツの考え方に基づき、人生を豊かにするための教養を身に付けるという役割を担っている。

結果的には、この2つの役割が有機的に作用することを理念として掲げている。

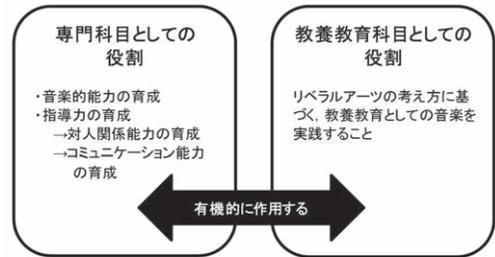


図1 「合唱」の授業の目的と理念

2.3 「合唱」の授業の特徴

2.3.1 定期演奏会との関連

広島大学では本講座主催の定期演奏会を毎年11月～12月に実施している。会場は学内にあるサタケメモリアルホールであり、内容としては、室内楽、管弦楽、吹奏楽、合唱を行っている。この演奏内容は、授業での練習が基本となっており、基本的には毎週1コマの授業で練習を行っている。本番が近付くと、エキストラでの強化練習も組まれる。定期演奏会の運営は学生が主体であり、その年の3年生が中心となる。

定期演奏会の運営については、本講座では「コンサートマネジメント」という授業と関連させて行っている。「コンサートマネジメント」の授業の目的は、定期演奏会に向けてコンサートマネジメントの実践をし、企画力・実践力を養うことである。3年生はこの授業において、運営についての講義を受け、運営会議を開くなど行っている。3年生1人ひとりが、委員長、合唱インスペクター、吹奏楽インスペクター、オーケストラインスペクター、広報、ステージマネージャー、写真・ビデオなど、それぞれに役割を担い、それぞれに活動をしている。この授業は本講座内の専門必修科目として単位化されていることが特徴である。

定期演奏会の中で演奏される合唱では、本講座の「合唱」の授業を履修していれば、本講座の学生でなくとも、演奏会に参加することができる。

2.3.2 広島大学公開講座・高大連携科目との関連

「合唱」の授業は、広島大学公開講座と、高大連携科目とも同時開講をしている。広島大学公開講座は県内の一般の方に向けてのもので、今年度で開講10周年になる。参加者は毎年30名以上おり、年齢は小学生から80歳近くの高齢者までが参加している。高大連携では、県内の高校生に向けて開講されており、毎年2～3名程度の参加者がある。

2.3.3 大学院の授業との関連

「合唱」の授業は、大学院の授業とも関連している。大学院教育学研究科生涯活動教育学専攻の学生を対象とした「生涯活動教育学特講」という必修の講義において、全15回の授業のうち、1～2回は「合唱」の授業と同時開講され、院生と学部生が同時に授業を受けている。

2.3.4 RCC との連携

広島において、毎年行われている RCC 主催の「第九」の演奏があり、管弦楽は広島交響楽団が行っている。この合唱団に参加するためには、県内の各地区で行われている練習に参加することが条件なのだが、本学は「合唱」の授業で毎年「第九」を扱うため、希望者は、指揮者合わせと G.P. のみでの参加が認められた。

2.4 「合唱」の授業で期待される効果

「合唱」の授業では、これまでに述べたように、音楽文化教育学講座の学生だけでなく、他講座・他学部の学生、公開講座に参加している一般の方、高大連携に参加している高校生、生涯活動教育学専攻の大学院生が共に授業を受けている。

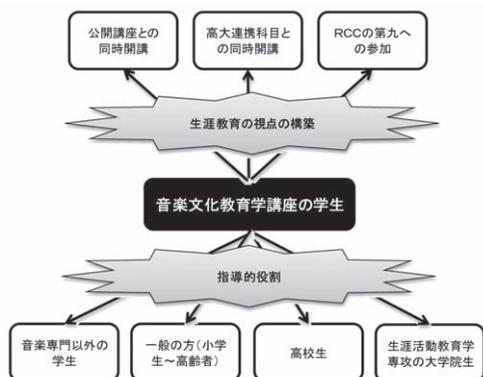


図2 「合唱」の授業での期待される効果

授業の中では、我々教員による合唱指導だけでなく、教員養成の観点から、本講座の学生が指導にあたるこ

ともある。したがって、パート練習や全体練習、定期演奏会の運営などとおして、本講座の学生が指導的役割を担ってくれることを期待している。

また、公開講座や高大連携との同時開講、そして RCC 主催の第九への参加により、一般の方とのコミュニケーションをはかることができ、さらに社会貢献になることが考えられる。こうしたことをとおして、本講座の学生が将来、社会教育で指導に当たることも視野に入れながら、生涯教育の視点を構築することを期待している。

3. 「オペラ実習」の授業の概要

3.1 「オペラ実習」の授業の沿革

本授業は、平成4年度に「重唱」という名称でスタートし、平成7年度から、現在の名称である「オペラ実習」という授業になった。「オペラ実習Ⅰ～Ⅳ」が学部2・3年生の授業として開講されているが、1・4年生や大学院生も希望すれば参加することができる。

歌手としての参加はもちろんのこと、伴奏者、裏方スタッフなど、さまざまな立場での履修が可能である。

3.2 「オペラ実習」の授業の目的と理念

「オペラ実習」の目的は大きく分けて2点ある。

1点目は、音楽の専門的能力の育成である。オペラの名シーンを実際に演じたり、伴奏の専門家を外部指導者として招き、レクチャーを受けて実践に生かすことなどを目的としている。

2点目は、企画力・実践力の育成である。本授業では、演奏だけではなく、舞台装置や衣装、広報活動など、オペラの運営に関わるすべてのことを企画・実践している。

こうしたことをとおして、本授業の理念として掲げていることは、「プリモ・プリマを作らない」ということである。一般的な公演では、歌手や指揮者、演出家が主体となるが、本授業では、裏方まで全員が同じ立場にあり、全員が主体となって活動する。これは本番において、全員が平等にカーテンコールを受けるという伝統にも表れている。

3.3 「オペラ実習」での活動内容

3.3.1 学内オペラハイライト公演

本講座では、年に2回、学内オペラハイライト公演を行っている。前期履修者の公演は11月、後期履修者の公演を4月に実施しており、会場は本学音楽棟内の演奏室である。定期演奏会と同様に「オペラ実習」で

もインスペクターを3年生から選出し、学生が主体となって運営に当たる。さらに、経験のある大学院生がTAとなって指導的立場で参加している。

オペラハイライト公演では、大きく分けて、歌手、伴奏者、スタッフの3つの仕事がある。その中でもスタッフの仕事内容としては、照明、大道具、小道具、衣装、字幕、広報、プログラム、チラシ、会計などがあり、スタッフを希望して履修する学生も多く存在する。また、この3つの仕事があるが、1人が2つ以上の仕事を兼任することも多く、特にスタッフの仕事内容については、ほぼ全員で関わる。

「オペラ実習」においては、歌手も伴奏者もスタッフも、全員がその公演内容の音楽や物語を理解し、そこから各分野の業務に取り掛かる。つまり、歌手は演技や歌唱表現の工夫、伴奏者は場面ごとの伴奏法や演奏表現の工夫、スタッフは演奏者が歌いやすく、演技しやすい衣装や道具、効果的な照明、演出の意図に合った字幕の作成などを行う。「オペラ実習」の特徴として、1人が2つ以上の仕事を担っている場合が多いため、自分の主な役割についての工夫のみならず、お互いの仕事へのアドバイスや意見交換など、各分野が有機的に関わり合い、全員で製作に参加している。

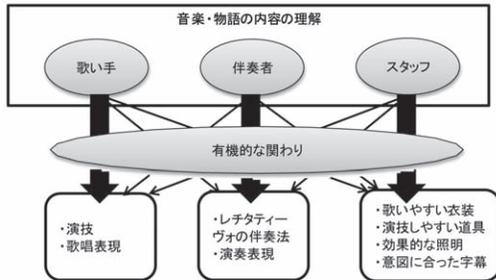


図3 学内オペラハイライト公演の仕事内容

3.3.2 アウトリーチ活動

オペラ実習の主な活動のうち1つとして、アウトリーチ活動がある。依頼があれば、学内のみでなく、東広島市内のホールや公民館、地域の酒蔵、幼稚園、小・中学校、他大学でのオペラ鑑賞教室や公演を行っている。また、山口大学との大学間交流公演も行っている。

アウトリーチ活動の特徴としては、演奏場所によって広さや条件もさまざまであるため、その場のキャパシティや客層に合った演出を行うことである。特に演奏場所は、アウトリーチの場合、コンサートホールではないことがほとんどで、体育館や公民館の1部屋、教室など、演奏に適した環境にないことが多い。会場によって使用できる照明の容量や持ち出すことのでき

る大道具も異なるため、授業での経験を生かしながら、同じ演目を行うにも、学生たちはさまざまな工夫をしている。

4. 「合唱」「オペラ実習」の効果の検証

本学で行われている「合唱」「オペラ実習」の授業と「総合的な人間力」の育成との関連について調査するため、これまでに本授業を受講したことのある卒業生の中で、小・中・高等学校の教員として勤務している11名と、現在オペラ実習を受講している教員志望の学生14名にアンケートを行った。

4.1 アンケートの内容

本アンケートは大きく3つに分けられる。1つ目は回答者自身のことについて、2つ目は「合唱」「オペラ実習」を受講したことによって向上した能力について、3つめは合唱・オペラ実習についての自由記述である。

4.2 アンケート回答者の概要

アンケート回答者は、本学卒業生で小・中・高等学校の教諭として勤務している11名と、現在オペラ実習を受講している学生14名の計25名である。

25名の入学年度は以下のとおりである。

表1 アンケート回答者の入学年度

15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度
2	4	1	0	2	8	1	2	4	1

また、教諭として勤務している11名のうち、小学校勤務は1名、中学校勤務は9名、特別支援学校勤務は1名である。

25名のうち、「合唱」「オペラ実習」を受講した学年（単位の有無は不問）は以下のとおりである。また、両授業のインスペクター、TAを務めた人数についても示す。

表2 アンケート回答者の受講経験のある学年・役職

	合唱	オペラ実習
1年次	25	19
2年次	24	23
3年次	23	19
4年次	9	11
大学院生	5	10
インスペクター	6	4
TA	6	7

オペラ実習の受講経験者24名のうち、担当したことのある役割としては、キャストが18名、伴奏者が7名、スタッフは12名であり、それぞれ2つ以上の役割を担う場合もある。

4.3 「合唱」授業についてのアンケート結果

「合唱」授業を受講したことにより向上した能力についてのアンケート結果を以下に示す。また、ここに挙げてある5つの能力は、「総合的な人間力」について示されている能力である。

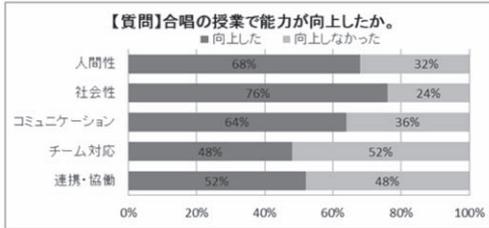


図4 「合唱」受講と能力向上の関連

図4から「合唱」授業を受講したことにより向上した能力について概観すると、もっとも向上したと感じているのは「社会性」であり、次いで「豊かな人間性」「コミュニケーション力」となっている。「チームで対応する力」については、向上したと感じているのは半数以下である。

次に、図4の結果をさらに具体的に見ていく。それぞれの能力について、どのような場面において特に意味があったかという問いについての結果を以下に示す(複数回答可)。



図5 豊かな人間性が向上した場面



図6 社会性が向上した場面

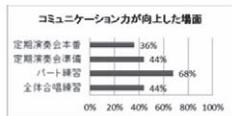


図7 コミュニケーション力が向上した場面



図8 チームで対応する力が向上した場面



図9 多様な組織と連携・協働できる力が向上した場面

まず、68%の受講経験者が合唱の授業で向上したと感じている「豊かな人間性」について、もっとも多かったのは、全体での合唱練習時であった。これは、合唱を行うことにより、音楽の表現方法などを学び、豊かな感情表現のありかたなどを習得することができたという結果であろう。逆にもっとも少なかったのは、パート練習時であった。パート練習時の最大の目的は、自

分のパートの音を確実にすることであるため、表現を豊かにするための練習にはならなかったのかもしれない。

そのパート練習時で特に向上したと感じられた能力は、コミュニケーション力であり、次いでチームで対応する力であった。パート練習では、全体練習に比べて人数が少なくなり、声の性質が似ているという共通点もあるため、団結力が深まりやすいのではないかと考える。全体合唱練習時に比べ、コミュニケーションをとる量も増え、さらには公開講座参加者の一般市民や、高大連携の高校生、他学部の学生など、さまざまな人たちと会話しながら行うため、こうした能力が向上したと感じられたのではないだろうか。

次に、合唱受講経験者がもっとも向上したと感じている社会性については、定期演奏会の準備時に特に向上したと感じている。これは、コンサートマネジメントの授業との関連もあり、演奏会そのものを企画・運営していく中で、培われたものであると言える。定期演奏会準備の仕事の中には、公開講座の一般市民をはじめ、本講座外の参加者に対し、指導的立場での役割や、連絡事項などを伝える役割などがあり、さまざまな人たちとのやりとりの中で、社会性が身に付いていったのではないだろうか。

同じく、定期演奏会準備時にもっとも向上した能力として、多様な組織と連携・協働できる力があり、全体の64%が向上したと回答している。先述のように、やはりコンサートマネジメントとの関わりが強い。ここでいう多様な組織とは、合唱以外のオーケストラや吹奏楽のメンバーや、会場となるホールスタッフなども含まれる。

最後に、「合唱」を受講し、現在の職業の役に立っているかどうかを質問した。この回答については、現在教職に就いている者についてのみ、結果を示す。



図10 合唱の受講が現在の教職に役立っているかどうか

現在教職に就いている11名全員が役に立っていると回答している。その理由として挙げていることは以下のとおりである。

- ・どのようにして合唱を作り上げていけるかが分かった。
- ・全員で音楽を作り上げていく喜びを感じることができ、生徒たちにもぜひ伝えたいと思った。
- ・合唱を行う技術に加え、多様な組織を1つにまとめるための方法を考える機会を得ることができた。

- ・実践現場では、合唱は欠かせない柱であり、子どもたちの表現力や感受性を高める上でも不可欠である。
- ・学級や学校全体で子どもたちのつながりをつくる中でも、パート練習や全体練習、縦割り交流など子どもたちが積極的に関わるにあたり、有効である。
- ・発声の仕方を学び、また有名な合唱曲を経験できた。オーケストラとの合唱の経験もできた。
- ・実際に合唱の練習を体験したり、本番の機会があったことで、合唱指導の際の勉強になった。
- ・授業に役立っている。
- ・「合唱はできない人が混ざっても成り立つ」という教えが印象的で、「できなくても参加しよう」と呼びかけることができるようになった。
- ・発声法の指導や曲の作り方などの参考になった。

役に立った理由として、以上のように述べている。演奏技術や合唱指導法についての知識や技術向上はもちろんのこと、それ以外に特に注目する内容に下線を引いた。「多様な組織を1つにまとめるための方法を考える機会を得ることができた」という内容は、定期演奏会の運営に関わることでありと考えられる。また「パート練習や全体練習、縦割り交流など子どもたちと積極的に関わるにあたり、有効だ」と答えているが、これはさまざまな年齢や他学部の学生との関わりの中で身に付いた能力が生かされていると言える。さらに「できなくても参加しよう」と呼びかけることができるようになった」と答えていることについては、合唱という手段が、さまざまなレベルをもつ人たちが集まっている中で、得意な者が苦手な者を助けながら成り立つものになり得るという特性と関連している。学校教育の現場には、さまざまな能力差のある生徒が存在し、合唱などの活動には、苦手意識があるなどして、参加を拒否する生徒もいる。そうした生徒への対応の在り方のヒントを得られたのではないだろうか。

4.4 「オペラ実習」授業についてのアンケート結果

「オペラ実習」授業を受講したことにより向上した能力についてのアンケート結果を以下に示す。

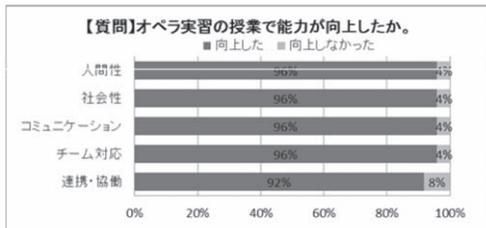


図11 「オペラ実習」受講と能力向上との関連

ほとんどの受講経験者が5つすべての能力について「向上した」と回答している。さらにこの内容を具体的に見ていく。どのような場面において、特に意味があったかという問いについての結果を以下に示す。

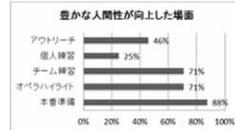


図12 豊かな人間性が向上した場面



図13 社会性が向上した場面

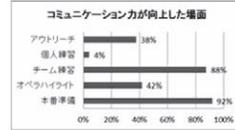


図14 コミュニケーション力が向上した場面

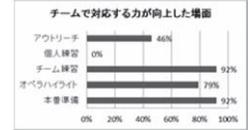


図15 チームで対応する力が向上した場面



図16 多様な組織と連携・協働できる力が向上した場面

まず、すべての能力向上の場面として選択されていたのは、「本番準備」の場面である。「オペラ実習」では、年2回、学内でのオペラハイライトを上演しており、その上演が活動の中心となっている。オペラハイライトの準備で行うことといえば、まず音楽稽古から開始され、スタッフも他の場面の出演者もすべてが全チームの稽古を参観し、音楽や物語の内容などを全員が把握した上で、スタッフが中心となり、演出に見合った字幕や衣装、大道具、小道具などを作成していく。そうした過程の中で、ほとんどの受講経験者がさまざまな能力の向上につながる経験をしている。

そして、5つの能力の中で「多様な組織と連携・協働できる力」以外の能力については「チーム練習」も大きな働きをしていることがわかる。オペラ実習においては、各チームでいかに真剣に取り組むかということが大切であり、一人ひとりの能力だけでは成功に至らない。したがって「チームで対応する力」の向上は当然ながら、それ以外の「豊かな人間性」「社会性」「コミュニケーション力」の向上にも関連していると考えられる。

また「アウトリーチ」については、オペラ実習の受講経験者全員が体験していることではないため、割合としては低いが、実際は、アウトリーチを体験した、ほぼすべての経験者が、すべての能力向上に関連していることを主張している。これは、アウトリーチ活動が、学内にとどまらず、広島県内の公民館や小・中学校での演奏であるため、よりさまざまな人々と交流する必要があり、そうした能力の向上につながっていると考えられる。

さらに、オペラハイライト当日も、準備より割合は少ないが、いくつかの能力向上に寄与している。オペ

ラハイライトを上演し終わると、非常に大きな達成感を感じることができ、この場面は、チームごとの団結が深まるシーンである。

最後に「オペラ実習」を受講し、現在の職業の役に立っているかどうかを質問した。先ほどと同様に、現在教職に就いている者についてのみ、結果を示す。



図17 オペラ実習の受講が現在の教職に役立っているかどうか

「合唱」受講者と同様に、「オペラ実習」についても、現在教職に就いている11名全員が役に立っていると回答している。その理由として挙げていることは以下のとおりである。

- ・改善点などを話合うときに、積極的に声をあげていけるようになった。
- ・チームで協力してやり遂げるいい経験になった。
- ・基礎的な音楽知識に加え、表現する力を高めることができた。
- ・現場でオペラを教えることはないが、ステージ上の歌手だけでなく、裏方の役割など、実体験をもって子どもたちに語るにより、より身近に感じてもらうことができる。
- ・仲間と意見を出し合ってコミュニケーションをとる経験ができた。
- ・ステージをつくること、タイムスケジュールなど、実際の授業や課外活動の実践ができた。
- ・子どもたちを主体的に動かせる経験ができた。
- ・インバクを経験し、企画やまわりをまとめることに役立った。
- ・学校行事をシュミレーションできた。
- ・生徒が舞台発表をする際に、どのような指導や環境が必要となるのか、具体的に考えられるようになった。
- ・さまざまな楽曲や伴奏にすぐに対応できるようになった。
- ・生徒の前での立ち振る舞いや授業の組立てに役立っている。
- ・現在の学校でミュージカルの取り組みをしていることもあり、総合芸術というものをみんなで作り上げるという過程が、オペラ実習での取り組みと重なっている。
- ・オペラは技術だけではなく、他のキャストやスタッフとの協力がないと運営が難しく、一人ひとりの役割や責任が明確であるため、チームで何かを作る上げる力は、音楽科の枠を超えても役に立つ。
- ・オペラを見るだけでなく演じることで、演技やオペラの成り立ちなどを学べたので、オペラの授業をするときに引き出しが増えたと思う。

歌唱や伴奏の基礎的な技術の向上について述べているものが多くあったのはもちろんのこと、その他に特記すべき内容について、下線を引いた。

まず「チームで協力してやり遂げるいい経験になった」と述べている。ありきたりの内容ではあるが、こうした経験をしているからこそ、実際の現場においてチームで対応することができるのではないだろうか。

また「仲間と意見を出し合ってコミュニケーションをとる経験ができた」と述べていたが、望ましいコミュニケーションとは、単に上辺だけでの付き合いをすることではなく、自分の意見も主張しながら、相手の意見も受け入れ、話し合うことが大切である。そうした体験ができたと感じられたならば、実際の職場でも生かすことができる。

さらに「オペラは歌唱技術だけではなく、他のキャストやスタッフとの協力がないと運営が難しく、一人ひとりの役割や責任が明確であるため、チームで何かを作る上げる力は、音楽科の枠を超えても役に立つ」と感じている経験者がいた。全員で力を合わせて作り上げる方法はいろいろと考えられるが、オペラ実習では、総合芸術であるということもあり、多様な役割が必要となる。一人ひとりに重要な仕事が割り振られ、さらには1人が複数の仕事を任されることもある。したがって、一人ひとりが確実に仕事をこなす必要があり、さらにはその仕事がお互いに関連しているため、決して1人では成功しえないのである。こうした経験は現場でも役に立つようである。

5. 総括

本稿では、これまでに行ってきた「合唱」「オペラ実習」の授業の沿革や概要、活動内容についてまとめるとともに、本授業が教員に求められている「総合的な人間力」の育成にどのように関わっているのかということについて検証を行った。

実際に、合唱やオペラ実習を熱心に受講していた学生の、教員採用試験合格率は高い。アンケートを行った結果、中央教育審議会が示している「総合的な人間力」の内容である「豊かな人間性」「社会性」「コミュニケーション力」「チームで対応する力」「多様な組織と連携・協働できる力」の5つの能力と、本授業の関連が見られた。

特に「合唱」においては、異年齢の仲間との交流と、定期演奏会の企画・運営が大きな役割を担っていることがわかった。普段生活している中で、小学生から高齢者までが共に活動することは、大学生にとっては珍しいことである。そうした異年齢、他学部の人たちなど音楽を専門に学んでいない人たちと共に演奏し、本番を行うということは、そのような方たちと積極的に関わり、コミュニケーションをとっていく必要がある。

「オペラ実習」では、総合芸術であるということも、多様な仕事の存在が教育的意義につながっていると考えられる。オペラとはいえ、音楽を専門に学んでいる学生のためだけの授業ではなく、伴奏者やスタッフとして

も受講可能な点がポイントである。さらにそうした多様な仕事、オペラにおいて1つの物語を作り上げるという1つの目的達成のために成り立っているため、より団結力が必要となり、互いの創造力や、意見交換が必要なのである。

以上のように、本講座の「合唱」「オペラ実習」では、こうした経験により、単に音楽的演奏能力を身に付けるだけではなく、指導的立場で授業に参加すること、チームで主体的に活動し、1つのものを作り上げることを目的としている。その結果、「総合的な人間力」の育成に少なからず寄与しているのではないだろうか。

6. おわりに

本稿では、「総合的な人間力」に焦点を当てて考察を行った。しかし、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」に示されている、教師の資質はこれだけではない。また、この「合唱」「オペラ実習」の授業に関しても、自由記述の内容からもわかるように、総合的な人間力以外

の能力の育成にも、大きく関連していることがわかった。今後、本授業をより工夫させていくことはもちろんのこと、成果を整理し、時代に即したさらに効果的な授業の在り方について考えていかなければならない。

【注・および引用文献】

- 1) 中央教育審議会(2012)「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について(答申)」
- 2) 山根文男・木多功彦「理想の教師像についての調査研究(2)一学校長等のインタビューから一」『岡山大学教師教育開発センター紀要』第3号, 2013, pp.90-97.
- 3) 河合保秀「[「十津川サマースクール」]の教育的意義について一チームによる活動をとおして見えてきたこと」奈良教育大学教職大学院研究紀要『学校教育実践研究』5号, 2013, pp.63-70.